

論文

# 菅江真澄の採集した西行伝承

— 付載 鎌田正苗『秋田郡寺内村古跡記』 —

星 野 岳 義\*

## 1 はじめに

円位上人こと西行の伝承につき、菅江真澄の述作を手掛かりにして、研覈していく。古今東西を問わず、生前または没後まもなくから、風説に彩られた人物はいるわけで、西行もその典型といえる。いわゆる説話としては、やはく鴨長明『発心集』67段や、阿仏尼『十六夜日記』1279年10月23日条に登場する。さらに、道興『廻国雑記』1487年3月条には「西行がえり」を、宗長『宗長手記』1522年9月条には「西行谷」を収載するため、中世の段階で西行伝承が在地化していたと分かる。

各地の西行伝承を、採集して検討した嚆矢としては、山中共古が挙げられる。山中共古は、高木敏雄『日本伝説集』に西行伝承を提供し〔高木 1913b: 246〕、ほぼ同時に『郷土研究』誌上にて問いかけ〔山中 1913: 52〕、さらに高木敏雄が答える〔高木 1913a: 32〕、という一幕もあった。いっぽう柳田国男は、かねてより巫覡による歌占に注目しており〔柳田 1914: 28〕、これに西行伝承を引き寄せたのが、論文「西行橋」になる。爾来、西行伝承には、夥しい調査研究があり、こうした研究史は花部英雄が整理

している〔花部 2012〕。

真澄遊覧記に描かれた西行にも、あとから詳述するように、作歌と伝承の両面から、研究の蓄積がある。このため、そもそも蓄積のない坂上田村麻呂伝承などとは、取り組みかたを異にしていよう。それでも従来は、真澄遊覧記を抜粋し、その解説を試みる、という紋切り型の論法が採られがちであった。かかる傾向は、真澄遊覧記に描かれた民俗芸能にもみえ〔星野 2013: 131〕、つまり真澄遊覧記を主題に据えたゆえの、真澄研究に共通した限界であったと解しうる。

そこで本稿では、真澄研究に対して西行伝承研究ができることではなく、西行伝承研究に対して真澄研究ができること、に留意する。この実現のために、さいしょに先行研究との重複を恐れず、結果において記事を一覧にする。そのうえで考察において、西行伝承研究に貢献しうる、真澄遊覧記にまつわる論点を、3つほど取り上げる。なお、西行橋から派生した、香炉木橋の問題を補うために、末尾で鎌田正苗『秋田郡寺内村古跡記』を翻刻するものとする。

\* 早稲田大学大学院社会科学研究所 2012年修士課程修了（指導教員 内藤 明）

## 2 結 果

真澄遊覧記にみえる西行には、作歌を引用したものと、伝承を紹介したものがある。作歌は事実といえ、伝承は仮構といえるが、もとより作歌には誤伝があるし、また伝承の一部をなす作歌もあるので、峻別できるわけではない。そこで本稿では、真澄遊覧記にみえる西行に臨んで、作歌と伝承に跨って、その記事を一覧にしてみた(表1)。作表にあたっては、まず行を、未来社刊『菅江真澄全集』の巻数順に、作歌または伝承場所ごとに抽出する。つぎに列として、当該伝承の摘要、当該伝承の真澄遊覧記の出所、それに対する先行研究を付した。原則として、場所を特定できるものは、文献を引用している件でも、採用することにした。例外として、場所を特定できなくても、西行伝承を研究するうえで有益である、と判断したときは採用した。

このうち先行研究に関して、若干の補足説明を施しておく。専論としては、科学研究費補助金研究成果報告書『西行伝説の説話・伝承学的研究』が重要といえる。第1次には小堀光夫論文が、第3次には錦仁論文が、それぞれ収録されている。採集としては、作歌には佐伯和香子の成果が[佐伯 2009: 238]、伝承には小堀光夫の成果が[小堀 2007: 110]、まとまったものとなっている。これら採集の成果は、直近に考察をとみなわず、かつ煩雑になるため、一覧表の先行研究には掲載しなかった。なお、真澄遊覧記から西行橋に取り組んだ、中山太郎の事績に関しては、考察にて一章を設けた。

## 3 考 察

### 3.1 歌語りと真澄遊覧記

西行伝承の歌語りを糸口にして、真澄遊覧記の歌物語としての側面を、探究してみたい。まずは、歌語りとしての西行伝承について。『はしわの若葉統』1786年9月25日条には、陸奥国磐井郡山目村にある逆柴山伝承を記す。

……円位法師尋ね給ひし、女の立たる石、今ものこりて、此石に口に病ある人、ねぎごとすれば、すみやかにいゆと、里の子いへり。[菅江 1981: 83]

この病気を治癒せしめる石は、西行または西行を騙った民間宗教者の、法力のなせる業なのだろう。ならば空海が、里芋を石芋にしたり、霊泉を湧出せしめたりする法力と、同視しうると解釈できる。ところで、この逆柴山伝承は、真澄遊覧記を披見する限りでは、他の西行伝承にありがちな、西行作歌に収斂していく結構を採っていない。そもそも、歌謡に収斂していく伝承は、真澄遊覧記を繙くだけでも、西行のみならず慈鎮[菅江 1978: 375]や空海[菅江 1974: 267]にも確認できる。すなわち、歌謡を即吟する法力は、病気を治癒せしめる法力に、匹敵するような偉業だったわけで、これは伝承の代替関係[星野 2014a: 108]を考えるうえでも看過しがたい。

それでは、歌謡に収斂していく伝承には、いかなる意味があるのか。不定型の文中に、定型詩を織り交ぜればアクセントになるから、といった構造上の要請も否定はしない。しかし、ここで考えたいのは、歌語りの末裔であるから、という理由になる。益田勝実論文は、歌に説明を伴ったものが歌語りであり、この歌語り

表1 真澄遊覧記にみえる西行の作歌または伝承

作歌または伝承場所	摘 要	真 澄 遊 覧 記		先行研究
		タイトル	出 所	
信濃国伊那郡 (風越山)	「風越のみねのつづきに 咲花はいつ盛ともなく て散らん」	『伊那の中路』1783年3月 21日条	菅江 1971a: 13	小堀 2001: 22。小堀 2004: 67。小堀 2006: 7。錦 2008: 51
信濃国安曇郡 (有明山)	「科野なる有明山を西に 見てこゝろ細野の路を 行かな」	『伊那の中路』1783年10月 21日条 『くめじの橋』1784年7月 14日条	菅江 1971a: 49, 163	小堀 2001: 22。小堀 2004: 67。小堀 2006: 7。錦 2008: 52
信濃国筑摩郡松本城下付近	西行作歌と伝える「駒 か嶽すそ野、森に来て 見れば小町か家にはや すな草」を保持する	『諏訪の海』1784年1月22 日条 断簡28号	菅江 1971a: 116。菅 江 1981: 151	小堀 2001: 22。小堀 2004: 67。小堀 2006: 7。錦 2008: 52
信濃国安曇郡佐野村 (二僧庵)	西行が行脚したころ、 ある法師が歌を詠む	『くめじの橋』1784年7月 16日条	菅江 1971a: 166	
信濃国佐久郡大久保村 (布引山釈尊寺)	「望月の御牧の胸は寒か らし布引山をきたとお もへは」	『くめじの橋』1784年7月 23日条 鳥屋長秋宛11月28日付書簡	菅江 1971a: 172。菅 江 1981: 192	
出羽国田川郡小波渡村付近	西行が一泊し、「山はだ の岨のたつ木に居る鳩 の友よぶ声のすごきゆ ふくれ」と詠む	『秋田のかりね』1784年9 月15日条	菅江 1971a: 192	小堀 2001: 21。小堀 2004: 66。小堀 2006: 7。錦 2008: 52
出羽国田川郡手向村 (羽黒山)	西行戻	『秋田のかりね』1784年9 月20日条	菅江 1971a: 197	戸川 1973: 3。小堀 2001: 22。小堀 2006: 11
出羽国由利郡塩越村 (象潟)	「たゞきさがたの秋の夕 ぐれ」 「波に埋れて」と詠んだ 桜木	『秋田のかりね』1784年9 月27日, 29日条	菅江 1971a: 205, 207	小堀 2001: 24。小堀 2006: 7。錦 2008: 52
山城国宇治郡醍醐村 (笠取山)	「正木わのひたのたへみ や出ぬらむ村雨晴ぬ笠 とりの山」	『秋田のかりね』1784年9 月15日条	菅江 1971a: 225	錦 2008: 53
(不詳)	「花のもとにて春しな ん」	『小野のふるさと』1785年 2月15日条	菅江 1971a: 241	錦 2008: 53
陸奥国津軽郡 (岩木山)	「ふし見てもふしとやい はむみちのくの岩城の 山の雪のあけほの」 「富士見ずばふじとやい はむみちのくの岩城の 嶽をそれとながめむ」	『外が浜風』1785年8月9 日条 『花の出羽路』秋田郡 『筆のまにまに』8巻	菅江 1971a: 273。菅 江 1979: 346。菅江 1974: 215	小堀 2006: 10。錦 2008: 55
陸奥国岩手郡洪民村 (岩手山)	「とへば名をいはての丘 としるべきを奥の不 尽とはこれをいはわし」	『けふのせば布』1785年9 月8日条	菅江 1971a: 311-312	小堀 2001: 22。小堀 2004: 67。小堀 2006: 7
陸奥国江刺郡下門岡村 (稲瀬の渡り)	「音に聞くにみの山の霍 公鳥否背の渡くり返し なく」 「みちのくの和賀と江刺 のさかひこそ河にはい なせ山にまた森」 「道奥の門岡山のほと、 ぎす稲瀬のわたりかけ て鳴也」	『けふのせば布』1785年9 月28日条 『岩手の山』1788年6月24 日条	菅江 1971a: 319, 433	小堀 2001: 22。小堀 2004: 67。小堀 2006: 7。錦 2008: 53
陸奥国磐井郡五串村 (平泉野)	尼寺跡、西行庵の跡	『かすむ駒形』1786年1月 20日条 『はしわの若葉』1786年4 月10日条 『筆のまにまに』2巻 『桜がり』下巻 『かすむ駒形続』1786年3 月8日条	菅江 1971a: 341, 374。菅江 1974: 57, 290。菅江 1981: 39	小堀 2003: 33。錦 2008: 53

陸奥国伊閉郡猿沢村 (石清山観福寺)	西行らが岩石に歌謡を 彫る	『はしわの若葉』1786年 4 月 7 日条	菅江 1971a: 368	小堀 2003: 36。錦 2008: 53
紀伊国牟婁郡熊野	「かつみふく熊野まうで のやどりをばこもくろ めとぞいふべかりけり」	『はしわの若葉』1786年 5 月 5 日条 『筆のまにまに』 4 卷	菅江 1971a: 385。菅 江 1974: 116	小堀 2001: 22。小堀 2003: 36。小堀 2004: 67。小堀 2006: 7。 錦 2008: 54-55
陸奥国胆沢郡下衣川村付近 (土橋)	「衣川汀によりてたつ浪 はきしのまつかねあら ふなりけり」と詠んだ 河畔 「とりわきてこゝろもし みてさえぞ渡るころも 川見に来たるけふしも」 「聞もせすたはしね山 の桜花よしのほかに かゝるへしとは」 「奥になほ人見ぬ花の散 らぬあれやたづね越ゆ らん山ほととぎす」	『雪の胆沢辺』1786年10月 27日条 『かすむ駒形続』1786年 3 月 8 日条	菅江 1971a: 412。菅 江 1981: 38-39	小堀 2003: 33, 35。 小堀 2006: 8
(不詳)	「身を捨てこそ」	『錦の浜』1799年 2 月 5 日 条	菅江 1972: 266	
大和国吉野郡吉野山 (苔清水)	「とくとくと落る岩間の 苺 [ママ] 清水汲ほす ほどもなき住居かな」	『雪の出羽路』平鹿郡13	菅江 1976: 511	
陸奥国耶麻郡大塩村 (塩の井)	「海士もなく浦ならすし てみちのくの山かつの くむ大しほの里」	『雪の出羽路』平鹿郡14	菅江 1976: 599	錦 2008: 54
(不詳)	橡は西行作歌にもある	『月の出羽路』仙北郡10	菅江 1978: 319	錦 2008: 54
(不詳)	「此春は花をしまでよ そならぬ心を風の宮に まかせて」	『月の出羽路』仙北郡14	菅江 1978: 436	錦 2008: 54
讃岐国鞆足郡 (飯野山)	「讃岐にてこれをや富士 と飯の山朝けの煙たゆ るまなし」	『花の出羽路』秋田郡	菅江 1979: 346	小堀 2006: 10。錦 2008: 55
薩摩国頴娃郡 (開聞岳)	「薩摩かた頴娃郡なるう つは嶋是や筑紫のふじ といふらむ」	『花の出羽路』秋田郡	菅江 1979: 346	小堀 2006: 10。錦 2008: 55
美濃国恵那郡中野村 (竹林庵)	西行が3年住む	『粉本稿』	菅江 1973b: 3 図	小堀 2001: 25。小堀 2004: 69。小堀 2006: 5
三河国加茂郡拳母城下	「ほと近く衣の里となり にけりふたむら山を越 えて来たれば」	『百白の図』 『新古祝甕品類の図』	菅江 1973b: 169 図, 323 図	小堀 2001: 25。小堀 2004: 70。小堀 2006: 9。錦 2008: 54
陸奥国磐井郡山目村 (逆柴山)	西行を尋ねた女性が、 石碑を建てる	『筆のまにまに』 2 卷 『かすむ駒形続』1786年 3 月 8 日条 『はしわの若葉続』1786年 9 月 25 日条	菅江 1974: 57。菅江 1981: 36, 83	小堀 2003: 33
甲斐国巨摩郡 (身延山)	「雨しのぐ身延の山の垣 柴に巢立そめぬる鶯の 声」	『筆のまにまに』 5 卷	菅江 1974: 146	
能登国鳳至郡付近 (いなやつの郡)	西行が見仏上人を訪れ る	『筆のまにまに』 8 卷	菅江 1974: 221	
(不詳)	「篠撓テ雀弓張男童額烏 帽子ノ欲気ナル哉」	『風の落葉』 3	菅江 1980: 73	

陸奥国信夫郡付近	「ふむもおし紅葉のにしきちりしきて人もかよはぬ慮のはし」	『はしわの若葉統』1986年6月26日条	菅江 1981:67	
陸奥国宮城郡松島村	西行もどし。西行が「月にそふかつらおのこのかよひちに薄はらむはたか子なるらん」と詠むと、童子が「雨もふり霞もかゝり霧もふるすゝきはらむはたか子なるらん」と詠み、西行が引き返す。童子は山王の神	『はしわの若葉統』1786年7月27日条	菅江 1981:69	小堀 2003: 37。小堀 2006: 8
近江国坂田郡醒井村(泡子塚)	西行が茶を飲み、娘が茶碗の泡を舐めたところ、懐胎する	断簡49-50号	菅江 1981:161	小堀 2004: 74。小堀 2006: 10。錦 2008: 55
信濃国小県郡	小県を、ちいさがたと読むのは、往昔も同じ	断簡51号	菅江 1981:161	錦 2008: 55
山城国葛野郡上嵯峨村(名古曾滝跡)	「いまたにもかゝると聞し滝つせのその折まてはむかしなりけり」	『千代の古道』	菅江 1981:214	
讃岐国阿野郡青海村(白峯陵)	西行が崇徳天皇陵を訪れる	『玉勝間拾珠抄』1	菅江 1981:264	
伊勢国(東熊野街道)	いせのべぢの錦の嶋	『玉勝間拾珠抄』9	菅江 1981:318	
伊勢国	「いせ人は餅事しけりさ、栗のさゝにはならて柴にこそなれ」	『真隅雑抄』	菅江 1981:369	
(不詳)	『山家集』などの読書歴	『真隅雑抄』	菅江 1981:386	
近江国滋賀郡	あさましくやつれたる僧の近く家を出けると見えて、月代なとあざやかに見えたり	『斯伎具佐波夫伎夫美』秋 艸上	菅江 1981:445	

の産物が歌物語なのだ〔益田 1950: 63〕、と解釈している。なるほど、語りものと密接な関係にある軍記物語には、歌謡に収斂していく件が、散見される通りである〔星野 2012: 216〕。上述より、西行作歌のある西行伝承は、歌語りが歌物語へと昇華しないまま、巷間で有為転変を繰り返し、やがて西行なる固有名詞を獲得していった集合体、と仮定できる。

つぎに、真澄遊覧記の歌物語としての側面について。森山弘毅論文は、菅江真澄が歌語りを書き留めることで、歌物語を記したことにもなった〔森山 2003: 285〕、という趣旨の指摘をする。この指摘は、西行作歌のある西行伝承にもあてはまるし、菅江真澄自身も真澄遊覧記を、歌物語風にしたと思われる節があ

る。菅江真澄は、自作または他作の歌謡を掲載して、その日の日記を締め括ることがあり〔菅江 1971b: 453; 菅江 1972: 15〕、これは歌物語の特色ともいえる。さらに、菅江真澄は、郷愁をもって日記を綴っているが〔菅江 1971a: 382; 菅江 1971b: 449〕、これも『伊勢物語』9段と重なり合うし、もちろん菅江真澄は『伊勢物語』を知悉している〔菅江 1974: 383〕。上述より、真澄遊覧記所収の歌謡とは、これが真澄遊覧記内部にて再創造を志向したものだったなら、そこには転載以上の狙いがあったと捉えられる。

ドイツ人指揮者のフルトヴェングラー(W. Furtwängler)は、音楽作品の再創造とは、全体を粉碎して混沌を呼び戻し、はじめて全体の創造が可能になる、と主張した〔フルトヴェン



グラ 1978: 88-89]。これは、音楽作品のみならず、菅江真澄が真澄遊覧記のなかに、西行の作歌や伝承を融合させた試みにも、通底するのではなかろうか。ところが、現代の知見を備えた、真澄遊覧記の読者は、歌謡や芸能や植物といった、個々の記述を分析するようになった。芸能や植物は、こうした分析に耐えたが、歌謡とくに菅江真澄作歌が酷評されたのは[柳田 1930: 16]、公知の事実である。かかる評価の高低にかかわらず、個別を包含した全体として、真澄遊覧記が玩味されにくかったのは、その著者にも読者にも不幸だったといえる。

### 3.2 西行橋たる構成要件

西行伝承の一翼を担う、西行橋の構成要件とは何か、討究してみたい。いわゆる西行橋の代表的な粗筋は、西行が来訪し、女性や子どもと歌謡を交わし、西行が判断に迷う、というものである。ここに、在地の伝承56件と、西行橋との関連が推測される、歌集の逸話2件を、一覧にした(表2)。作表にあたっては、まず行を、日本列島の北から南へ、伝承場所ごとに掲載する。伝説と昔話の区別なく掲載したため、伝承場所が不詳の場合は、当該伝承の採集地に代えた。つぎに列として、西行橋の名称、摘要、出所を掲載した。摘要にて、西行が引き返した場合、その表現が「逃げ去る」「立ち去る」「渡らない」であっても、引き返すに統一するなど、若干の読み替えを行なっている。なお、表1と表2を照らし合わせると、真澄遊覧記の西行橋は3件であると、あらためて把握できる。

一覧のうち、美濃国や飛騨国では、西行が引き返しておらず、同様の結末であるという武蔵国とともに[小堀 2001: 23]、刮目に値する。

ここでは、飛騨国大野郡小木曾村の西行橋を、「続丹生川昔話」から引用したい。

昔、西行法師が托鉢に出られて旅をする時に、わざとボロボロにやぶれた法衣を身にまとひ、やぶれころもにやぶれ笠をかぶり、乞食坊主の姿となつてある村へはいりかかると夕立が降つて来たから、長者の家の門の前の屋根の下で雨宿をなしてたゞずんで止みそうもない空を見上げて居られると、長者のヲカツ様が出て来たので、西行法師は挨拶をしようと思ふ間に、ヲカツ様は見すばらしい姿に眉をひそめて、ナンジャ、乞食坊主ではないか。そんな所に立つて居てはよいこともないから早く出て行つてくれと怒りながらにらみかかると、西行法師は一首の歌をクチについて出た。

世の中をいふまでこそかたからめ

仮の宿を惜しむ君かな

と歌をよむと、ヲカツ様はビツクリして、今迄の閻魔顔がエベス顔にかわつて、ニコニコと笑ひながら、和尚様今宵は私の宅にお泊りなさいといふて泊めてやつたといふ。[松岡、松岡、松岡 1941: 92-93]

西行が、醜い風貌を長者に咎められるも、最後は歌謡を即吟して、一宿を得たと要約できる。ちなみに、日向国臼杵郡岳之枝尾村の嶽之枝尾神楽「宿借り」も、山人が、醜い風貌を宿主に咎められるも、最後は歌謡を唱和して、一宿を得るという物語であった[山口 2000: 249]。ともに前述したように、歌謡を即吟する法力が、病気を治癒せしめる法力に、匹敵するような偉業であったと読み取れよう。こうした事例を踏まえつつ、つぎに掲げる構成要件から、西行橋に接近してみたい。

第一要件として、来訪すること。西行と、民間宗教者とくに高野聖との係わりには、かねてより先学が注意を促してきた[松本 1994: 382; 西沢 1998: 105]。「続丹生川昔話」の西行像からも、勧進に訪れる高野聖、さらにはマレビト

表2 周知されている西行橋

伝承場所	西行橋の名称	摘 要	出 所
陸奥国津軽郡弘前城下付近	(不詳)	西行が「磯辺のわらはどハマ馴れて、オキ来る波の数、覚えたか」と詠むと、童が「西行は宿がなければ野に寝たり、空出る星の数、覚えたか」と詠み、西行が感心する	稲田, 小沢編 1982: 540
陸奥国九戸郡野田村	西行屋敷	西行が「えいほう(海女)は毎日浜に通へども寄せ来る波の数は知るまい」と詠むと、海女が「西行は諸修行いたせども空なる星の数は知るまい」と詠み、西行が恥じる	金野, 須知 1980: 115
陸奥国遠田郡鮎岳(無夷山麓峯寺)	西行戻しの石	西行が、娘の刈っているものを問うと、娘が「夏かれて冬生えたるや草を刈る」と詠み、また西行が、男の子の食べているものを問うと、男の子が「一口に入るに足らざる草の実を越後食うとは何をいうらむ」と詠み、西行が引き返す	中川編 1989: 65
陸奥国宮城郡塩竈村	思弁橋	西行が橋の名を問い、「思弁橋」と答える	岡 1965: 492
陸奥国宮城郡松島村	西行戻しの松	西行が「月にそふ桂男のかよひ来てすゝきはらむは誰か子なるらん」と詠むと、童子が「雨もふり霞もかゝり霧もふるはらむすゝきは誰か子なるらん」と詠み、西行が引き返す。童子は宮千代	相原 1923: 279
陸奥国伊達郡白根村	くるか橋	西行に憎まれた文覚が、橋に腰掛けて、振り返り「来るか来るか」と独り言をした	近藤 1928: 136
陸奥国信夫郡付近(『山家集』雑)	思惑の橋	紅葉の散った橋を渡るのに躊躇したため、西行が人に問うと、人が「思惑の橋」と答えたため、西行が「踏ま憂き紅葉の錦散敷きて人も通はぬ思はくの橋」と詠む	西沢, 宇津木, 久保田 2003: 214
陸奥国耶麻郡松橋村	西行の戻り橋	西行が、野苺は美味いかと問うと、子どもが「今をだに口にも足らぬ草の実をえちこ(越後)食うとはおかしそうさん」と詠み、西行が「天竺の天霧姫が通い来てすすき尾花は誰が子なるらん」と詠むと、子どもが「天竺の雪霧雨が通い来てすすき尾花は天子なるらん」と詠み、西行が引き返す	猪苗代町史編さん委員会編 1979: 635
陸奥国菊多郡上遠野町村	西行の足跡と伝える岩石	西行が、少女の行先を問うと、少女が「冬ほきて夏枯草を刈りに行く」と答え、西行が引き返す。少女は滝不動	いわき市史編さん委員会編 1972: 551
出羽国田川郡手向村(羽黒山)	西行戻り	西行が引き返す	東水 1987: 122
出羽国村山郡米沢村(瑞宝山慈恩寺)	西行戻しの涙坂	西行が、若者の行先を問うと、若者が「冬萌えて、夏枯れ草を刈りに行く」と答え、また西行が、木苺を子どもにあげようとする、子どもが「腹のたそくにはならぬ、いちごげるとは誰がいうらん」と答え、西行が引き返し涙を流す。若者と子どもは知恵地藏尊	「古里のむか志」編集委員会編 1980: 2
常陸国筑波郡筑波町(筑波山大御堂)	西行戻し	西行が「磯遠く海辺も遠き山中にわかめあるこそふしぎなりけり」と詠むと、少女が「つくばとは波つく山といふなればわかめありともくるしかるまじ」と詠み、西行が引き返す。少女は女体権現	釈 1983: 78
下野国都賀郡日光町(稻荷神社)	西行戻り石	西行が、子どもの行先を問うと、子どもが「冬萌きて夏枯れ草を刈りに行く」と答え、西行が引き返す	日光市史編さん委員会編 1979: 1224
上野国利根郡須賀川村	歌止川	西行が、少女の行先を問うと、少女が「冬ほきて夏には枯るゝ草刈に」と答え、西行が引き返す	片品村史編纂委員会編 1963: 556
上野国利根郡菅沼村	下の橋	西行が、娘の行方を問うと、娘が「冬ほきて、夏枯れる草を刈りに行く」と答え、西行が引き返す	井田 1991: 102
武蔵国比企郡馬場村	富士坂	西行が「富士山と娘姿の横帯びは締める間もなく障子ごしかな」と詠むと、娘が「横雲を帯びと駿河の富士の山後ろへ廻し甲斐の口かな」と詠み、西行が引き返す	都幾川村史編さん委員会編 1999: 516
武蔵国比企郡桃木村(都幾山慈光寺)	西行橋	坊主が「冬立ちて、夏枯とはこれ如何に」と問うと、西行が戸惑い引き返す	都幾川村史編さん委員会編 1999: 516
武蔵国比企郡平村(都幾山慈光寺)	西行の見返坂	西行が、小僧の行先を問うと、小僧が「冬ほきて夏枯草を刈にゆく」と答え、西行が引き返す。小僧は観音	郷土研究室編 1938: 206
武蔵国榛沢郡末野村	西行戻しの橋	西行が、子どもの行先を問うと、子どもが「冬萌きの夏枯れ草を刈りに行く」と答え、また西行が「その絹を売るか」と問うと、絹を織る女が「ウルカとは川の瀬にすむ鮎のはらわた」と答え、西行が引き返す	葦塚編 1973: 632

武蔵国秩父郡金沢村	上小川橋	西行が、娘の行先を問うと、娘が「冬ほきて夏霜枯れの草かりに」と答え、西行が引き返す。娘は妙見様	埼玉県女子師範学校郷土研究会編 1931: 100
武蔵国秩父郡白久村 (自由山門通寺)	道端の草の上	農民が「白久(白く)にも(黒い)坊主が寝ているな」と問うと、西行が「白久という字も墨で書く」と答え、農民が「冬ほきて夏枯れ草を刈りにゆく」と問うと、西行は意味が分からない	秩父の伝説編集委員会編 2007: 65
武蔵国秩父郡大野原村	西行戻し坂	西行が、娘の行先を問うと、娘が「冬ほきて夏枯れ草を刈りに行く」と答え、西行が引き返す。娘は妙見様	秩父の伝説編集委員会編 2007: 80
相模国鎌倉郡腰越村	西行の戻り松	西行が、娘の行先を問うと、娘が「冬は来て夏枯れ草を刈りにいく」と答え、西行が引き返す	大藤 1977: 448
相模国鎌倉郡片瀬村	西行戻松	西行が、引き返して松を見た	小川 1976: 39
相模国鎌倉郡大町村	西行橋	西行が躊躇した	河井ら 1929: 98
相模国愛甲郡飯山村	西行戻り橋	西行が「その綿をこの僧に売ってはくれまいか」と問うと、老婆が「この川を鮎取る川としりながら綿(腸)を売る(潤す)かと染衣の法師」と答え、西行が引き返す	厚木市教育研究所 1988: 143
越後国蒲原郡国上村	西行の戻石	西行が「わらびにて手を焼くべからず」と問うと、童子が「予等は手を焼くも僧も松笠を被りて頭を焼く勿れ」と答え、西行が引き返す	温古談話会編 1977: 645
越中国射水郡大窪村 (石動山)	西行戻しの岩	西行が、百姓の荷物を問うと、百姓が「こりゃ21日や」と答え、また西行が「でっかいことのわらびをもって、手を焼かっしゃるな」と問うと、子どもが「ひのき笠かぶってずこ焼くな」と答え、西行が引き返す	高西 1984: 110
加賀国江沼郡八日市村 (動橋)	都戻り	西行と西住が行脚していたところ、西住が九谷へ引き返し、西行が都へ引き返した	塚 1931: 6
越前国今立郡	(不詳)	西行が「子供らや蕨つんであつないか」と詠むと、子どもが「西行や松笠着てあつないか」と詠み、西行が辟易する	中塩 1939: 30
越前国足羽郡浅水村	朝六橋	西行が朝水村に一泊して、橋上で「越に来て富士とはいはん角原の文殊ヶ岳の雪のあけほの」と詠む	河合編 1936: 67
越前国丹生郡野田村付近	ある山里の祠	西行が「わら火つかんであつないか」と詠むと、子どもが「火の木かさつけてあつないか」と詠む。子どもは薬師如来	鯖江市史編集委員会編 1973: 550
甲斐国八代郡八ノ尻村	(不詳)	西行が、馬方の荷物を問うと、「冬青くて夏枯れる草の実よ」と答え、西行が引き返す	小沢 福原、森野編 1980: 232
甲斐国巨摩郡万沢村	西行峠	山の民が「イキツナツボシ花ガキツナニブピライタル桶トジノ花」と詠み、西行が引き返す	山中 1926: 巻上110
信濃国小県郡馬越村	西行戻橋	西行が、麦畑を指して何かと問うと、童子が「冬茎たちの夏かれ草なり」と答え、西行が驚き引き返す	井出 1976: 137
信濃国水内郡荒安村付近	飯縄原	西行が「わらびにて手なやきそ」と問うと、子どもが「ひの木笠にてかしらなやきそ」と答え、西行が「さるちごと見るよりはやく木にのぼる」と詠むと、子どもが「犬のやうなる法師きたれば」と詠み、西行が引き返す	豊田 1983: 92
信濃国水内郡戸隠山門前 (日ノ御子社)	西行桜	西行が「猿稚児とみるより早く木に登る」と詠むと、子どもが「犬の様な法師来たれば」と詠み、西行が引き返す	戸隠村誌刊行会 1962: 199
飛騨国大野郡小木曽村	屋根の下	西行が零落して訪れ、「世の中をいとふまでこそかたからめ飯の宿を惜しむ君かな」と詠み、長者が驚き宿を貸す	松岡、松岡、松岡 1941: 92-93
美濃国恵那郡茄子川村	大井川の七瀬	殿様が「大井川七瀬渡ると聞きしかどかれなる僧は噎せ(六瀬)わたる」と詠むと、西行が「僧は噎せ(六瀬)殿のお馬は瘦せ(八瀬)わたるとかく七瀬は渡らざりけり」と詠み、殿様が引き返す	大橋編 1977: 259
美濃国安八郡墨俣村 (清光山明台寺)	笑地藏	西行と西住が行脚していたところ、橋柱で彫刻した地藏に対して西住が、「朽残るまさごの下の橋ばしら又さまかへて人わたす也」と詠むと、地藏が微笑する	山下 1991: 147
尾張国熱田郡宮宿 (熱田神宮)	西行の二十五丁橋	西行が「かくばかり木かけ涼しき宮なるを誰かあつたと名づけそめけん」と詠むと、白衣の人が「やよ法師あづまの方にいきながらなど西行と名のりそめけん」と詠み、西行が引き返す。白衣の人は大明神	愛知県教育会編 1937: 171。武田、福田 1976: 12
伊勢国一志郡垂水村 (垂水山成就寺)	木の下	西行が「さる見とみるより早く木にのぼる」と詠むと、童子が「犬のやうなる法師来たれば」と詠む	薮 1919: 228
伊勢国度会郡浦田町 (西行谷神照寺)	宇治川の橋	西行が綿を背負っていたところ、櫛木館が綿を売るかと問うと、西行が「宇治川の橋の瀬にふすあゆのはらもこそうるかといへるわたは有けれ」と詠む	安岡 1978: 226-227



山城国葛野郡天竜寺門前	歌詠橋	西行が童子と歌を贈答し、西行が負ける	白晝撰 1929: 211
摂津国西成郡江口村 (『新古今和歌集』 羈旅歌)	遊女の宿	西行は宿を借りたかったのに、遊女妙は貸さなかったので、西行が「世の中をいとふまでこそ難からめ仮の宿をも惜しむ君かな」と詠むと、妙が「世をいとふ人とし聞けば仮の宿に心とむなと思ふばかりぞ」と詠む	峯村校 1995: 289
紀伊国牟婁郡波田須村	西行法師の帰り松	西行が、子どもの行先を問うと、「冬青々、夏枯れ草を取りに行く」と答え、西行が引き返した	熊野市史編集委員会編 1983: 1151
安芸国佐伯郡厳島 (二王門前)	西行返	西行が、道を尋ねると、姫が「うつせみのもぬけのからにこととへば山路をさへもをしへざりけり」と詠み、西行が引き返す	岡田 1980: 238
安芸国山県郡戸内村	ある橋	西行が「西行はながの修行はするけれど豆に策はこれがはじめて」と詠むと、ある女が「尻にこしきは豆蒸し杵があるなら突けや西行」と詠み、西行が負ける	磯貝編 1974: 137
伯耆国八橋郡槻下村 (月ノ下)	(不詳)	西行が「世界みな月の下にてあるものをこの里ばかり月の下とや」と詠むと、村人が「この里はいつきの下と書くものを照る月ばかりつきと思うか」と詠む	東伯町誌編さん委員会編 1968: 593
石見国美濃郡下道川村	(不詳)	西行が「わらの火で手を焼くなよ」と問うと、娘が「桧のかさで頭を焼きなさんよ」と答える	島根大学昔話研究会編 1976: 232
石見国鹿足郡注連川村付近	柿崎の木賃宿	西行が零落して訪れ、主人が冷遇のち厚遇したところ、西行が「柿崎にししぶ宿をとりかねて、主の心熟したりける」と詠む	小野寺 1981: 98
讃岐国阿野郡羽床上村	境の峠	西行が「そこにおけるのは、わらべじゃないか」と問うと、子どもが「そこにおけるのは、西行さんでないか、ひのきのの笠でおつむやくない」と答える	綾上町教育委員会編 1982: 284
筑前国志摩郡前原村 (雷山)	西行返り	西行が、少年の行先を問うと、少年が「冬茂る夏草風の根を刈りに行く」と答え、西行が引き返す。少年は千手観音	佐々木編 1936: 84
豊後国国東郡千灯村 (補陀落山千灯寺)	西行戻し	西行が、綿を売るかと言うと、小僧が「谷川の瀬にすむ鮎の腹にこそうるかと言へるわはありけれ」と詠み、西行が引き返す	国見町史編集委員会編 1993: 87
肥前国松浦郡入野村	西行腰掛石	西行が「松浦渦これより西に山もなし月の入野のかざりなるらん」と詠み、引き返す	辺見, 仏坂, 宮地 1979: 101
肥後国葦北郡白石村	西行帰岩	西行が、綿を売るかと言うと、女が「白石の瀬にすむ鮎の腹にこそうるかといへるわは有けれ」と詠み、西行が引き返す	後藤編 1917: 395
肥後国八代郡柿迫村 (金海山大恩教寺)	(不詳)	西行が、綿を売るかと言うと、女が「山川の瀬にすむ魚のわたにこそうる物はありけれ」と詠む	伊藤 1934: 肥後137
薩摩国阿多郡花熟里村	西行坂	西行が、童子の行先を問うと、童子が「冬草の夏立枯を刈にまいる」と答え、西行が引き返す	五代, 橋口編 1982: 1050

の姿を髣髴とさせる。とすると西行橋は、招かざる客を穩便に追い返す物語とも、追い返すかどうかは任意の物語とも、受け取ることができよう。ところで、落魄した高野聖からは、半僧半俗を連想せしめる。たしかに、西行橋には西行戻しの別称があるが、ほかに弁慶戻し〔上生庵 1992: 84〕や宗祇戻し〔西白河郡役所編 1915: 462〕が存在し、いずれも法衣を纏った俗人といえる。伝承の登場人物が、無作為に選択されたものでないなら、西行橋は西行が相応しいとする理解が、伝承の担い手たちに共有されていたと再確認できる。

第二要件として、歌謡を交わすこと。『新古今和歌集』羈旅歌の贈答歌や、これを翻案した謡曲『江口』は、西行橋と同系と看做されてきたが〔柳田 1916: 7〕、やはり歌謡を交わしている。『新古今和歌集』羈旅歌の贈答歌を借用したのが、「続丹生川昔話」の一首であるから、この昔話の基軸が歌謡にあるのは間違いない。けだし、西行橋は、歌謡に収斂していく伝承であり、これは歌に説明が伴ったもの、ある種の歌語りとして捉えられる。ならば、こうした歌謡は、どのように成立したのか、簡単に整理したい。1つ目として、柳田国男説に代表

される〔柳田 1916: 7〕、歌占に源流を求めるもの。中山太郎は、神意を表現するのに歌占を使用した〔中山 1930a: 26〕、と指摘していて、ここにも民間宗教者の関与が垣間見える。2つ目として、小林幸夫説に代表される〔小林 1992: 284〕、茶会で西行作歌を取り上げていたというもの。ここからは、『筆の山口』1822年2月26日条の引用文「隠居の西行軒といへる庭」〔菅江 1980: 475〕を想起させる。この引用文は、津村涼庵『雪のふる道』1789年4月11日条に典拠がみえ〔津村 1972: 764〕、西行軒は、出羽国秋田郡手形村の大沢山閭信寺にあったと分かる。これによって、余暇に庵に集うような人たちに、西行伝承が増幅された、という余地が否みがたい。

第三要件として、判断に迷うこと。『山家集』雑の思惑の橋は、西行橋の原型と看做されてきたが〔西沢、宇津木、久保田 2003: 214〕、やはり判断に迷っている。西行橋には、西行返りの別称があり、判断に迷った結果としての、引き返すという行為を意味する、と捉えるのが自然であろう。けれども、返歌を「返し」とも呼び、これだと贈答歌を意味するのみだから、引き返す行為が必須なのか、疑問は残るのである。ともあれ、西行は僧侶で、相手の女性や子どもは神仏の化身だから、この邂逅は、神と人、男と女、といった人智の及ばない運命だったと解釈しうる。たとえば難題婿に、琉球國中城間切熱田村の熱田マーシリーがあるが、女性の出題に男性が即答できなかったために、両想いの男女に死が訪れ、生前は結ばれないのであった〔名護市史編さん室編 1991: 267〕。してみると、問答する2人は運命を共にする、いわば合わせ鏡であって、勝負や優劣といったものは、後世の

潤色である可能性があろう。

### 3.3 中山太郎が見た香炉木橋

中山太郎の論致を大前提としながら、菅江真澄の採集を小前提として、西行伝承の研究史を垣間見たい。中山太郎が、妹の婚家を訪問するために、上野駅を出発したのは、1929年7月のことだった〔中山 1929: 12〕。その帰途、陸奥国宮城郡松島村に伝わる、西行戻しの松につき聞き取りをし〔中山 1930b: 21〕、約1年後である1930年7月刊「旅と伝説」に結実するのであった。この論文で中山太郎は、柳田国男論文を踏襲しつつも、西行橋が処女の試験方法でもあったという推論を追加している。その論拠として、硫黄の匂いを嗅ぎながら渡らねばならない、肥後国阿蘇郡の左京ヶ橋を紹介して、さらに次のように続けた。

そして此の信仰と全く同じものが、九州の肥後とは五百里を隔てた奥州の秋田県の神社に在ったことを、菅江真澄の記録で見たことがあるが、今は明確に想ひ出せぬのでこれだけを言ふにとゞめる。〔中山 1930: 23-24〕

真澄遊覧記のなかに、硫黄の匂いを嗅ぎながら渡る橋があるのか、管見のところ確認できない。ただし、菅江真澄は、秋田郡寺内村にある、伽羅で造ったと伝える香炉木橋には、注意を払っている。『ひなの一ふし』『水の面影』『高志の栞』などに言及がみえるが、ここでは『高志の栞』を引用しておく。

秋田のかうろき橋は流れ寄りたる香木をもて掛たりし、そは香炉の木なるよしにて、浦人ところ人のしかいひしとなん。今はきやら橋とて、寺内の古道のかたにかゝりてあり。〔菅江 1980: 296-297〕

ちなみに、香炉木橋に関して、菅江真澄の披見しえた先行文献には、鎌田正苗『秋田郡寺内村古跡記』、人見蕉雨『黒甜瑣語』初編巻3、曲亭馬琴『玄同放言』巻1下が挙げられる。こうしたなか、中山太郎が、真澄遊覧記所収の香炉木橋を把握していたか不明であるが、『黒甜瑣語』所収の香炉木橋を把握していたのは確実となる。なぜならば、中山太郎「袖モギさん」に、『黒甜瑣語』所収の香炉木橋が参照されているからである〔中山 1923: 2〕。たしかに、中山太郎が「旅と伝説」で例示したかったのが、この香炉木橋だったといえるか、決め手に欠く。それでも、香炉木橋が、西行橋の研究に貢献できないとまでは、断言しがたい。

菅江真澄の墓碑は、香炉木橋の近くにあるが、石井忠行『伊頭園茶話』20巻に、「……犬戻しといふ辺りなる正宅が家の墓どころに葬りて……」〔石井 1972: 5〕とみえる。文中では、犬戻しの由来には触れていないが、武蔵国秩父郡大宮郷にも犬戻り橋があり、婚姻の当事者は迂回するという〔秩父郡教育会編 1925: 452〕。同様の慣習は、信濃国小県郡馬越村の西行戻橋〔滝沢 2005: 298〕や、山城国愛宕郡堀川的一条戻橋〔竹村 1961: 118〕にもあり、ともに西行橋の研究から論及されてきた。この慣習は、戻るという語感に起因するだけかもしれないが、そうではあれ、祝儀に嫌忌される西行像を読み取ることはできよう。

#### 4 おわりに

円位上人こと西行の伝承につき、菅江真澄の述作を手掛かりにして、研覈してきた。真澄研究に対して西行伝承研究ができるのではなく、西行伝承研究に対して真澄研究ができ

ること、に留意した。結果において、真澄遊覧記の記事を一覧にし、考察において、西行伝承研究の論点を整理している。考察を逆行してみると、中山太郎の事績を再評価することで、西行橋に対する理解が深化していき、歌語りとしての西行伝承が裨補される、と総括しうる。なお、行論上、積み残した論点があるので、杜撰ながら列挙してみたい。

第一に、伝承の風景描写について。前掲した「続丹生川昔話」は、夕立て西行が雨宿りをする、という場面設定が、物語を静から動へと牽引している。この物語に降雨がなければ、西行は長者と出会わなかったし、それゆえ即吟する機会もなかった。文学や芸能ならば、風景描写は留意されてしかるべきで、これらと口承にも関係があることを斟酌すれば、同様に風景描写を閑却しがたくなる。西行伝承以外にも、雨宿りして歌謡を交わすものに、吉屋チルー伝承が〔遠藤編 1999: 309〕、雨具のないことを歌謡に託すものに、太田道灌伝承が〔坂本編 1941: 28〕、挙げられる。他方、安倍伝承では、風景描写に降雪が好まれており〔星野 2013: 144〕、降雨と降雪に相違はあるのか、いかなる効用が期待できるのか、解決すべき事案は多い。

第二に、在地の伝承と、その雛形について。西行橋の構想には、民間宗教者が関与したのだろうが、その構想にあたっては、既成の素材を借用したと思われる。周知のように、『新古今和歌集』羈旅歌の贈答歌や、『山家集』雑の思惑の橋からは、西行橋の構成要件が見出せる。クラシックの変奏曲では、主題が提示されたあとで、複数の変奏が展開されるわけだが、この仕組みは西行橋にもあてはまろう。すなわち、主題たる歌集の逸話が、当該地域の木石に依り

つきながら、変奏たる在地の伝承を形成したのである。在地の伝承は、歌集の逸話と比較した場合、近いものもあれば遠いものもある。このうち遠いものは、どれほど歌集の逸話を脱線したなら、もはや西行橋の範疇にないと断言できるのか。換言すると、在地の伝承において、流布を断念したり、享受を放棄したりする限界につき、一考に値するといえよう。

第三に、鎌田正苗『秋田郡寺内村古跡記』について。『秋田郡寺内村古跡記』は、鎌田家と菅江真澄を語るうえでも、西行橋の研究史を語るうえでも、必要不可欠な文献となっている。にもかかわらず、これを討究する試みは低調だったようで、そうした討究の橋頭堡となすべく、まずは以下に翻刻を行ないたい。

## 5 鎌田正苗『秋田郡寺内村古跡記』の翻刻

鎌田正苗『秋田郡寺内村古跡記』は、散発的に関心が寄せられつつも、不十分な紹介に留まる傾向があった。1932年刊の大山宏論文には、「鎌田正苗の旧跡考」[大山 1932: 25]なる一節がみえる。1969年刊の内田武志編『菅江真澄隨筆集』では、真澄遊覧記に影響を与えたとして、『秋田郡寺内村古跡記』を翻刻している[菅江 1969: 225]。憾むらくは、内田武志の翻刻が、底本の所在を明示せず、しかも底本が不完全だったことだろう。1997年刊の中野稔論文は、昼寝山の条を[中野 1997: 94]、2014年刊の星野岳義論文は、児桜の条を[星野 2014b: 56]、それぞれ翻刻している。

そこで本稿では、4件の写本を閲覧し、このうち1件の全文を翻刻することにした。自筆本は確認しえなかったが、これは鎌田家の財産を奪った俵屋火事によって[渋谷 1981: 72]、焼



図 曲亭宗伯画「出羽秋田嶋沼並古四王社」

(曲亭馬琴著; 曲亭宗伯, 渡辺崋山画 1818. 『玄同放言』巻1下, 国文学研究資料館所蔵, 請求記号: ナ5-145-2, 7丁裏-8丁表。転載するには国文学研究資料館の許可が必要)

失したのではないかとも思われる。これらの書誌事項を、つぎに簡単に述べておく。

寺内旧跡記本は、大館市立中央図書館真崎文庫所蔵の『寺内旧跡記』所収[鎌田 1772以前a]。縦127mm×横176mmで、全9丁のうちの3丁分。タイトルは『秋田郡寺内村古跡記』で、責任表示は鎌田正苗著である。『寺内旧跡記』の巻末に、「真崎顕、写之」とみえる。

酔月堂雜録本は、大館市立中央図書館真崎文庫所蔵の『酔月堂雜録』6所収[鎌田 1772以前b]。縦126mm×横176mmで、全22丁のうちの3丁分。タイトルは『羽州秋田郡寺内村名所古跡記』で、責任表示はない。『羽州秋田郡寺内村名所古跡記』の文末に、「明治四未年夏四月下旬写之、海鷗間人」とみえる。

県立図書館本は、秋田県立図書館所蔵[鎌田 1772以前c]。縦119mm×横170mmで、全8丁のうちの8丁全て。タイトルは『秋田郡寺内村古跡記』で、責任表示はない。『秋田郡寺内村古跡記』の巻末に、「塩谷董綱藏」とみえる。

県公文書館本は、秋田県公文書館所蔵の『寺



内村旧跡叢書』所収〔鎌田 1772以前d〕。縦261mm×横191mmで、全13丁のうちの4丁分。タイトルは『寺内村古跡記』で、責任表示は鎌田正苗著である。『寺内村旧跡叢書』の巻末に、「明治二十一年六月二日小室怡々斎先生より借用写之、佐野程北」とみえる。

諸本を衡量すると、酔月堂雑録本と県公文書館本は、書写に精確を欠いており、改変が目立つ。とくに県公文書館本は、「高炉木橋」と誤記したり、綾小路の条を脱漏したりして、これは内田武志の翻刻と合致するため、内田武志は県公文書館本を底本にしたらしい。いっぽう、寺内旧跡記本と県立図書館本は、ほぼ同一にして瑕疵が僅かなため、自筆本に近いと推察される。本稿では、自筆本に近いことや、責任表示を明記していることなどを、総合的に勘案して、寺内旧跡記本を翻刻した。真崎文庫は、真崎勇助の収集が、栗盛教育団の保存を経て、秋田県大館市に寄付されたものだが、これまで寺内旧跡記本を翻刻したかは、記録がなく不明である。大館市立中央図書館をはじめ各館職員には、閲覧や複製にさいして配慮をいただいた旨を付記したい。

なお、『秋田郡寺内村古跡記』の読解を扶けるため、曲亭馬琴『玄同放言』巻1下のうち、曲亭宗伯画「出羽秋田嶋沼並古四王社」を掲出する(図)。画面向かって、中央に古四王社こと古四王神社が、左下にキヤラ橋こと香炉木橋が、それぞれ描き出されている。



(表紙)

#### 秋田郡寺内村古跡記

鎌田正苗著

##### 見桜

古四王権現の御宮より壺丁余、刈方<sup>ノ</sup>方にあり。むかし古四王宮神楽の時、桜ノ岡にて児の舞ありける処にて、今田畑となる。此辺山さくら多し。

##### 油田

古四王社より三丁斗、巳の方也。今云油田坂の辺、古四王の灯明料の田地あるに依り名付とも、又土油出るにより名付とも云也。

##### 長者平

古四王社より三丁余、未方<sup>ノ</sup>也。昔、旭長者、夕日長者といふあり。其夕日長者の屋敷にて今ハ川に近し。かけ崩たり仍て平の名あり。

##### 昼寝山

古四王社より三丁斗、午の方也。人王四十四代聖武天皇神亀四年、勅使を諸国<sup>江</sup>宣下給へて国司の政を改給ふ勅使此処に休けるにしきりに眠出て夢ともなく、うつゝともなくなりけるか、正しき位官の人顕て曰、高清水の岳に城を移すへき物語りして我ハ大彦命とせ給へけるて依也。昼寝山と名付也。

大彦命、崇神天皇御宇、人王十代河別<sup>二</sup>将東北国々夷敵征伐給ふ命也。天皇御后御間城姫の御父なり。

##### 勅使館

古四王社より二丁斗、申方<sup>ノ</sup>也。天平中、出羽国秋田の城、高清水の岳に移すと諸書に出る是也。勅使定置ける柵なれハとて、今も勅使館と人々号シ〔脚注＝人々号トアリ何ニカ仮名入ラズヤ。号シ〕、人王五十七代陽成院御宇、元慶二年、出羽夷賊千余人起り秋田城を焼破す。今いふ焼山也、昔焼岳といふ也。是より焼起りて寺内村西北ノ野山より種々の器物出ると也。

##### 梅湯茶屋

古四王社鳥井の前也。今ハ藤茶屋といふ。むかし都人此処に来て湯を呑、折しも梅の花湯に飛入ルれハ梅の香あり〔脚注＝梅の香あり。有り。ハ字ハ何ト云フ字ナルヤ〕。其後此例を以、梅の実を割て粉にし参詣の人にあたへける。不浄払也。于今、梅か香といふて袋に入、其粉諸人に求めしむ也。

##### 旭山

古四王社の鳥居の前、神主船木氏の屋敷を旭屋しきと云。此辺に長根那といふ処もあり。旭長者の住ける名なし此所にある古木を旭さし木といふ。古四王鎮座の所、亀の甲といふ。見桜処を亀の頭とし、旭



山を亀の尾とし、旭さし木の元にある井を亀の尾水とて霊水也。于今、眼洗水と人は称也。

#### 高清水

古四王社より壺丁余、酉の方也。古四王勸請の時、清泉涌出也。誠、霊水則右社御手洗也。

#### 香炉木橋

古四王社より一丁余、酉の方也。昔、旭夕日両長者、間路の橋にて、香に焼へき木にて懸渡也。依て伽羅橋とも云ふ也。

#### 綾小路

古四王社より壺丁斗、戌亥の方。此小路の内に梅屋敷といふあり。是の森の後匂ひ深く、是の綾めも分らぬと云ての名付也。

#### 梅屋敷

古四王社より壺丁斗、戌亥の方。高清水の柵の梅を種として、千本の梅を植置けるに名付也。

#### 両津坂

古四王社より式丁余、戌亥の方。田村將軍の城を東にして高清水の城を西になし、其中の山なれハ両都山といふ。土崎の湊、矢守弥兵衛といふ者、今の往来道開て、夫より両都山を両津坂といふ也。

#### 烏<sup>く</sup>池

古四王社より三丁余、戌亥の方、両津坂の下、往還の北の方にあり。むかし、此池の辺に行て婦人なしを帰らず池といふ。是をからす<sup>く</sup>池といふ。古四王社より五丁余、子の方、両津坂より四丁斗、卯の方に狼<sup>く</sup>沢といふ沼あり。百<sup>く</sup>年以前までハ田地なりしを自然と沼になる。此沼深くなるに付ケ、段々烏<sup>く</sup>池の水ハ涸これゆへ〔脚注＝涸れこれゆへナルヤ。涸これゆへ〕、狼<sup>く</sup>ヶ沢を烏<sup>く</sup>池といふ。

#### 幣切山

古四王社より五丁斗、亥の方也。坂上田村麿將軍、古四王宮を祈て北敵退治の時、此山にて幣を切、心信の諸神勸請有し処なり。戎夷平治して幾千代のいわいとして鶴を放せし処を鶴<sup>く</sup>池といふ。此辺に石神と云、又此辺に鬼爵坂と云あり。又此山の禁の野原を將軍野といふ。幣切山より卯辰の方、古四王の宮より丑の方、田村麿の城跡あり。是を矢止の城といふ。此辺に矢の根石出る也。

#### 義定<sup>く</sup>嶋

古四王の宮より五六丁、戌亥の方。田村麿此処にて戎夷退治して義を定給ふ処也。

#### 幕洗川

古四王社より戌亥の方、十丁斗也。田村麿、北敵退

治して幕を洗給ふ処也。今、土崎湊穀保丁の内の畑の字<sup>サ</sup>、幕洗川通りとある。此川の筋なり。

#### 太刀洗川

古四王宮より十丁斗、亥の方。幕洗の通り、將軍太刀を洗給ふ処也。

#### 右旧跡記終

鎌田正苗ハ寺内村ノ衞宜ノヨシ

〔投稿受理日2014.12.18／掲載決定日2015.1.29〕

#### 参考文献

- 愛知県教育会編 1937.『愛知県伝説集』郷土研究社  
相原友直 1923.「松島巡覧記」『仙台叢書』第2巻、  
仙台叢書刊行会、pp.209-280  
厚木市教育研究所 1988.『あつぎ子ども風土記』厚  
木市教育研究所  
綾上町教育委員会編 1982.『綾上町民俗誌』綾上町  
石井忠行著；井上隆明、田口勝一郎、渡部綱次郎編；  
今村義孝監修 1972.『新秋田叢書』第10巻、歴史  
図書社  
磯貝勇編 1974.『全国昔話資料集成』5、岩崎美術社  
井田安雄 1991.『群馬のなぞ』みやま文庫  
井出道貞著；信濃史料刊行会編 1976.「信濃奇勝録」  
『新編信濃史料叢書』第13巻、信濃史料刊行会、pp.  
5-240  
伊藤常足 1934.『太宰管内志』下巻、太宰管内志刊  
行会  
稲田浩二、小沢俊夫編 1982.『日本昔話通観』第2  
巻、同朋舎出版  
猪苗代町史編さん委員会編 1979.『猪苗代町史』民  
俗編、猪苗代町史出版委員会  
いわき市史編さん委員会編 1972.『いわき市史』第  
7巻、いわき市  
遠藤庄治編 1999.『中城の民話』中城村教育委員会  
大藤ゆき 1977.『鎌倉の民俗』かまくら春秋社  
大橋和華編 1977.『全国昔話資料集成』25、岩崎美  
術社  
大山宏 1932.「秋田城隍に就いて」『秋田県史跡調  
査報告』第1輯、秋田県史跡名勝天然記念物調査  
会、pp.1-60  
岡千仞著；塩竈市史編纂委員会編 1965.「塩松勝概」  
『塩竈市史』5、塩竈市役所、pp.486-503  
岡田清著；長谷章久編 1980.「厳島図会」『日本名所  
風俗図会』13、角川書店、pp.183-411  
小川泰堂 1976.「我がすむ里」『藤沢市史料集』2、  
藤沢市文書館、pp.1-61

- 小沢俊夫, 福原登美子, 森野郁子編 1980.『日本の民話』5, 再版, ぎょうせい
- 小野寺賀智著; 近藤雅尚編 1981.『小野寺賀智の昔話』『小野寺賀智の昔話』を刊行する会
- 温古談話会編 1977.『温古の栞』上, 歴史図書社
- 片品村史編纂委員会編 1963.『片品村史』片品村役場
- 鎌田正苗 1772以前a.『秋田郡寺内村古跡記』『寺内旧跡記』大館市立中央図書館真崎文庫所蔵, 文庫番号:M-976, 4丁表-6丁裏
- 鎌田正苗 1772以前b.『羽州秋田郡寺内村名所古跡記』『酔月堂雑録』6, 大館市立中央図書館真崎文庫所蔵, 文庫番号:M-23(6), 8丁表-10丁裏
- 鎌田正苗 1772以前c.『秋田郡寺内村古跡記』秋田県立図書館所蔵, 請求記号:A291.5-19
- 鎌田正苗 1772以前d.『寺内村古跡記』『寺内村旧跡叢書』秋田県公文書館所蔵, 資料番号:混架136-18-247, 5丁表-8丁裏
- 河合千秋編 1936.『福井県の伝説』福井県鯖江女子師範学校郷土研究部
- 河井恒久ら著; 芦田伊人編 1929.『新編鎌倉志』『大日本地誌大系』第19巻, 雄山閣, pp.1-115
- 郷土研究室編 1938.『川越地方郷土研究』第1巻第4冊, 埼玉県立川越高等女学院
- 曲亭馬琴著; 曲亭宗伯, 渡辺畢山画 1818.『玄同放言』巻1下, 国文学研究資料館所蔵, 請求記号:ナ5-145-2
- 金野静一, 須知徳平 1980.『日本の伝説』42, 角川書店
- 国見町編集委員会編 1993.『国見町史』国見町
- 熊野市史編纂委員会編 1983.『熊野市史』下巻, 熊野市
- 小林幸夫 1992.『狂歌咄西行論』『日本文学の原風景』三弥井書房, pp.271-293
- 小堀光夫 2001.『西行伝承と菅江真澄』『西行伝説の説話・伝承学的研究』第1次, 科学研究費補助金研究成果報告書, pp.21-25
- 小堀光夫 2003.『菅江真澄と西行伝承』『国学院雑誌』104(3), pp.30-42
- 小堀光夫 2004.『菅江真澄の旅と西行伝承』『昔話』32, pp.65-76
- 小堀光夫 2006.『菅江真澄の旅と西行の伝承和歌』『菅江真澄研究』58, pp.5-11
- 小堀光夫 2007.『菅江真澄と西行伝承』岩田書院
- 五代秀亮, 橋口兼柄編 1982.『三国名勝図会』第2巻, 青潮社
- 後藤是山編 1917.『肥後国志』下巻, 九州日日新聞社
- 近藤喜一 1928.『信達民譚集』郷土研究社
- 埼玉県女子師範学校郷土研究会編 1931.『郷土研究資料』第2輯, 埼玉県女子師範学校郷土研究会
- 佐伯和香子 2009.『菅江真澄の旅と和歌伝承』岩田書院
- 坂本辰之助編 1941.『豊島区史』豊島区役所
- 佐々木滋寛編 1936.『筑前の伝説』九州土俗研究会
- 鯖江市史編纂委員会編 1973.『鯖江市史』史料編・民俗編, 鯖江市役所
- 部関月著; 原田幹校 1919.『大日本名所図会』第1輯第4編, 大日本名所図会刊行会
- 渋谷鉄五郎 1981.『秋田の先人と子孫』ツバサ広業出版部
- 島根大学昔話研究会編 1976.『島根県美濃郡匹見町昔話集』島根大学昔話研究会
- 釈了貞 1983.『二十四輩順拝図会』1, 筑波書林
- 上生庵亮盛著; 桐原光明解説 1992.『筑波山名跡誌』筑波書林
- 菅江真澄著; 内田武志編 1969.『菅江真澄随筆集』平凡社
- 菅江真澄著; 内田武志, 宮本常一編 1971a(1巻), 1971b(2巻), 1972(3巻), 1973a(4巻), 1973b(9巻), 1974(10巻), 1975(5巻), 1976(6巻), 1978(7巻), 1979(8巻), 1980(11巻), 1981(12巻).『菅江真澄全集』未来社
- 高木敏雄 1913a.『西行法師閉口歌』『郷土研究』1(3), pp.32-33
- 高木敏雄 1913b.『日本伝説集』郷土研究社
- 高西力 1984.『石動山の伝説』『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』氷見市教育委員会, pp.107-117
- 滝沢きわこ 2005.『新編上田・佐久の民話』一草舎出版
- 武田静澄, 福田祥男 1976.『日本の伝説』7, 角川書店
- 竹村俊則 1961.『新撰京都名所図会』巻3, 白川書院
- 秩父郡教育会編 1925.『埼玉県秩父郡誌』秩父郡教育会
- 秩父の伝説編集委員会編 2007.『秩父の伝説』秩父市教育委員会
- 塚五明著; 日置謙校 1931.『茂憩紀聞』石川県図書

- 館協会
- 津村淙庵著; 竹内利美解題 1972. 「雪のふる道」『日本庶民生活史料集成』第20巻, 三一書房, pp. 735-811
- 東水著; 朝倉治彦編 1987. 「三山雅集」『日本名所風俗図会』1, 角川書店, pp. 105-149
- 東伯町誌編さん委員会編 1968. 『東伯町誌』東伯町役場
- 戸隠村誌刊行会 1962. 『戸隠村誌』戸隠村誌刊行会
- 戸川安章 1973. 「真澄が泊った羽黒山の宿坊」『菅江真澄全集月報』4, pp. 1-3
- 都幾川村史編さん委員会編 1999. 『都幾川村史』民俗編, 都幾川村
- 豊田庸園著; 鈴木棠三編 1983. 「善光寺道名所図会」『日本名所風俗図会』5, pp. 5-149
- 名護市史編さん室編 1991. 『名護市史叢書』12, 名護市教育委員会
- 中川清弥編 1989. 『篁岳のむかしばなしと伝承』篁岳老人クラブ連合会
- 中塩清之助 1939. 「狂歌咄と秀句咄と」『南越民俗』2(2), pp. 29-31
- 中野稔 1997. 「寺内のはなし」『北方風土』34, pp. 87-102
- 中山太郎 1923. 「袖モギさん」『郷土趣味』4(2), pp. 1-15
- 中山太郎 1929. 「松島から石ノ巻へ」『旅と伝説』2(9), pp. 12-15
- 中山太郎 1930a. 「神詠の研究」『潮音』16(5), pp. 22-26
- 中山太郎 1930b. 「旅と伝説」『旅と伝説』3(7), 20-24
- 錦仁 2008. 「新潟県その他の西行伝説と『菅江真澄全集』における西行関連記事」『西行伝説の説話・伝承学的研究』第3次, 科学研究費補助金研究成果報告書, pp. 33-55
- 西沢美仁 1998. 「花部英雄著『西行伝承の世界』」『伝承文学研究』47, pp. 98-106
- 西沢美仁, 宇津木言行, 久保田淳 2003. 『和歌文学大系』21, 明治書院
- 西白河郡役所編 1915. 『西白河郡誌』西白河郡役所
- 日光市史編さん委員会編 1979. 『日光市史』下巻, 日光市
- 韭塚一三郎編 1973. 『埼玉県伝説集成』中巻, 北辰図書出版
- 白樺撰; 芦田伊人編 1929. 『大日本地誌大系』第16巻, 雄山閣
- 花部英雄 2012. 「西行伝承の研究史」『西行学』3, pp. 131-139
- 「古里のむか志」編集委員会編 1980. 『古里のむか志』第2集, 寒河江市老人クラブ連合会
- フルトヴェングラー・ヴィルヘルム著; 芦津丈夫訳 1978. 『音と言葉』白水社
- 辺見じゅん, 仏坂勝男, 宮地武彦 1979. 『日本の伝説』38, 角川書店
- 星野岳義 2012. 「安倍貞任または安倍宗任に関する伝承」『社学研論集』19, pp. 213-221
- 星野岳義 2013. 「菅江真澄の見聞した民俗芸能」『社学研論集』21, pp. 131-146
- 星野岳義 2014a. 「坂上田村麻呂に関する伝承」『ソシオサイエンス』20, pp. 100-114
- 星野岳義 2014b. 「採物神楽の語りものとしての性質」『社学研論集』24, pp. 45-60
- 益田勝実 1950. 「『上代文学史稿』案」『日本文学史研究』4, pp. 29-70
- 松岡浅右衛門, 松岡つぎ, 松岡みか子 1941. 「続丹生川昔話集」『五倍子雑筆』10, pp. 33-126
- 松本寧至 1994. 「西行」『日本奇談逸話伝説大事典』勉誠社, pp. 381-384
- 峯村文人校 1995. 『新編日本古典文学全集』43, 小学館
- 森山弘毅 2003. 「菅江真澄採録の鄙の歌」『歌謡とは何か』和泉書院, pp. 271-286
- 安岡親毅著; 倉田正邦校 1978. 『勢陽五鈴遺響』5, 三重県郷土資料刊行会
- 柳田国男 [川村杳樹] 1914. 「細語の橋」『郷土研究』2(10), pp. 25-29
- 柳田国男 [川村杳樹] 1916. 「西行橋」『郷土研究』4(7), pp. 1-12
- 柳田国男 1930. 「秋田県と菅江真澄」『秋田考古会々誌』2(3), pp. 1-23
- 山口保明 2000. 『宮崎の神楽』欽脈社
- 山下琢巳 1991. 「『本朝俗諺誌』」『東京成徳短期大学紀要』24, pp. 125-159
- 山中共古 [山口笑] 1913. 「西行法師の閉口せし山賤の歌」『郷土研究』1(1), p. 52
- 山中共古 1926. 『甲斐の落葉』郷土研究社